

13. 島根県海士町

地域の図書館サービス充実支援事業（平成20年度地域の図書館サービス充実支援事業）

(1) 事業の趣旨・概要

平成19年度より、“離島”であり、“公立図書館”がないというまちの大きなハンディキャップを逆に活かし、地区公民館、港のターミナル、保健福祉センターなど人が多く集まる拠点をそれぞれ図書館分館と位置づけ、島全体をネットワーク化して1つの“図書館”と見立てる「島まるごと図書館構想」を掲げて取り組んでいる。この実現に向け、図書館サービスの拠点となる公民館図書室の環境整備を進めてきたが、さらに地区公民館などの地域分館に重点をおいた図書館運営のあり方、図書館サービスの展開方法について、利用者の声を聞きながら、より現実的な形で体系化し、高齢・過疎のまちにおいて誰もが等しく図書館サービスを受けることができるシステムの構築を目指した。

※委託先・図書館の概要（平成20年3月末現在）

委託先	自治体・機関名	島根県海士町教育委員会
	所在地	〒684-0403 島根県隠岐郡海士町1490番地
	連絡先	TEL 08514-2-1222
		FAX 08514-2-1633
	URL http://www.town.ama.shimane.jp/kurashi/guide/11000/	
図書館の概要（平成20年3月末現在）	職員数	図書館事業に関わる職員3人 (全員臨時職員／うち司書1人)
	開館時間	8:30～17:30 ※教育委員会事務局事務所に併設の中央公民館内に設置のため年末年始以外は開館
	年間開館日数	年末年始以外開館
	蔵書数	中央図書室 約2,700冊
	利用登録者数	※一般にいう利用登録制はとっていない (図書室は無人で、貸出は利用者が自身で貸出カードに記入)
	年間利用者数	107人
	年間貸出冊数	1483冊
	運営状況	3名の臨時職員が中央公民館図書室、学校図書館、移動図書館、20年度に設置した地域分館のすべての図書館業務を行っている。

※地域の現況・特色

<p>海士町（あまちょう）は島根県隠岐郡隠岐諸島の島前3島の1つ、中ノ島に位置する1島1町の町である。超過疎、超少子化、超高齢化という状況の中、町村合併をせず、産業の創設や人事交流など新たな試みで、島を挙げ生き残りをかけて取り組んでいる。</p> <p>公共図書館は未設置で、中央公民館内に図書室がある。また、書店も雑誌が主体で児童書が若干置いてある小さな店が1店だけという状況である。図書購入費は町費で予算計上されているのが20年度までは年間5万円だけであった。</p> <p>面積：33.44km² 周囲：89km 人口：2,400人</p>

(2) 事業の実施体制

事業実施にあたっては、「島まるごと図書館運営委員会」とその下部組織として内容別に3つ部会を組織した。

①島まるごと図書館運営委員会

<委員構成>

町教育委員会教育長、町教育委員会教育課長、町教育委員会学校教育係課長代理、小学校校長、保育園園長、町議員（読書ボランティア）、町教育委員2名、海士町観光協会代表、まちづくりグループ・アマネット代表、民生委員長、読み聞かせボランティア2名（うち1名は社会教育委員）、地区公民館長、読書推進コーディネーター、司書（事務局） 計16名

<主な役割>

事業全般に関する検討

②部会

○保育園・学校部会（学校図書館担当者会）

<委員構成>

保育園・小学校・中学校・高校の図書担当者、学校関係者

<主な役割>

学校図書館等の整備、読書活動・調べ学習の推進等、主に児童サービスに関する情報交換・協議

○読書ボランティア部会

<委員構成>

読み聞かせボランティアを中心に構成

<主な役割>

読み聞かせ活動の推進、学校図書館の図書環境整備に関する協議

○地域部会

<委員構成>

地域住民、地区公民館長、観光協会代表、地元書店店主、老人会代表、社会福祉協議会代表、音楽・美術サークル代表、文化財保護審議委員会代表

<主な役割>

事業の企画、図書館についての学習

(3) 事業体系

実施した事業は下記の7つである。

①本館・分館の環境整備	i 本館の充実 ii 分館の開設 iii 学校図書館の整備
②各地区公民館への図書館サービスの充実	i 移動図書館の巡回
③読書手帖の発行と個々の読書歴・興味に添った読書案内	i 読書手帖の発行
④小・中・高校、公共図書館の全蔵書のデータベース化と相互貸借システムの導入	i 小・中・高校、公共図書館の全蔵書のデータベース化 ii 相互貸借システムの導入
⑤読書推進を目的とした読書ボランティアとの連携による読み聞かせイベントや講師を招いての読書講演会等の実施	i ブックスタート活動 ii おはなし会 iii 学校での読み聞かせイベント iv 本を通じた読書交流イベント v 本に親しむための一般向け講演会

⑥人材育成を目的とした図書館関係者向け研修会の開催	i 図書館関係者研修会 ii ボランティア視察研修会 iii 図書館視察研修会 iv 図書館研修会
⑦島内外への図書館事業の広報活動	i 図書館新聞「この島の、本棚から。」発行 ii PR冊子「この島の、本棚から。」発行 iii 島まるごと図書館のホームページの開設

(4) 当事業に取り組んだ背景・経緯

図書館未設置町のため、島民は図書館というものを知る機会もなく、最低限の図書館サービスを受けることもなく生活していた。海士町の総合計画の3本の柱の1つである「人づくり」に関して、平成18年度の定例教育委員会において、5名の教育委員の間で「人づくりには読書活動が大事」ということが話題になり、そのためにはキーとなる人材が必要ということで、司書配置の予算を町に要望した。また先進地視察を通して、教育委員会関係者が図書館活動について啓発され、平成19年度に文部科学省の「“読む・調べる”習慣の確立に向けた実践研究事業」を受託し、司書等、図書館事業に関わる臨時職員3名を配置して、「島まるごと図書館構想」を掲げ、図書館の整備事業に着手した。

島内の小中学校3校の図書館は会議室として使われ、蔵書も古く、子どもたちにも教員にもあまり認知されず、全く機能していない状況であった。そのため、学校図書館の空間整備、図書資料の整理・充実、教員の意識改革から取り組んだ。各学校から2名（管理職、図書担当教諭）と教育長、司書が先進地や県内学校図書館の視察を行い、子どもが本に親しむ環境や図書館を使った授業を知り、図書館に対する認識を改めた。平成20年4月には、保育園から小・中・高校までの図書担当者が一堂に会し、はじめて図書館や子どもの読書についての意見交換を行った。「島まるごと図書館構想」を掲げての2年目である20年度は、本委託事業により、誰もが身近に本を感じ、等しく図書館サービスを受けられるよう環境整備を進めることにより、「読書の島」の実現を目指した。

(5) 各事業の内容と現在までの取り組み状況

①本館・分館の環境整備

本館にあたる中央公民館図書室のスペースを拡充、図書を分類・増設し、明るく使いやすい図書室へと環境を整備した。また、町内の拠点となる場所に分館を開設することで、本をより身近にし、気軽に図書館利用ができる環境づくりを行った。さらに、児童向け分館と位置づけた学校図書館の環境整備にも取り組んだ。

i 本館の充実

中央公民館内の廊下に置かれた書架に本が並んでいただけの図書室だったが、卓球スペースを利用し、図書室部分のスペースを拡大するとともに、古く利用されない図書を廃棄し、新規図書を整備した。また、その際、図書を分類・整理して配架し、表示をつけて本を探しやすくするとともに、図書室自体を入りやすく、利用しやすいような空間につくり変えた。また、新たに蔵書検索端末と郷土資料コーナーを設置した。

限られたスペースを有効に活用

活用例1



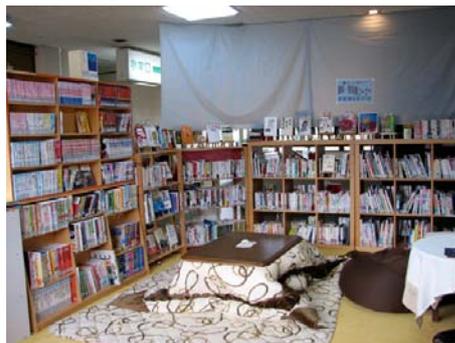
活用例2



蔵書検索端末



くつろげるスペースを設置



ii 分館の開設

町内の人が集まる拠点施設を中心に、書架と図書を配置し、図書館分館として開設した。

分館の開設場所：港ターミナル、健康福祉施設「ひまわり」、保育園、地区公民館4館 計7ヶ所



港ターミナルの待合室に設置された書架



靴箱の上に
図書を設置

保育園の入口に設置された図書コーナー

iii 学校図書館の整備

以前の小中学校の学校図書館は、古い本が無造作に書架に並べられている状態で、また、室内に会議用テーブルが置かれ、会議室としても使用されていたため、児童の出入りはほとんどなく、図書もあまり利用されない状況であった。司書等職員が教育委員会に配置されてから、3校を週3～4回巡回し、古い図書を廃棄、新規図書も含めて全図書を分類・整理し、表示をつけるなど、図書館のレイアウトを抜本的に変更し、子どもたちがゆっくり本を楽しめ、調べものができるスペースにした。図書については、中央公民館図書室と県立図書館からの配本も受けている。

<福井小学校>

会議室や応接室として使われていた図書館を20年度2学期から図書館専用リニューアルした。授業に出てくる内容に関連する本の紹介展示や授業での成果物を図書館内に掲示するなど、授業と連携した図書館利用を推進している。

元の図書館



リニューアル後



宮沢賢治の本の紹介展示と
それに関する児童の作品展示



図書の分類をわかりやすく表示掲示



<海士小学校>

会議室として使用され、高書架で圧迫感があった図書館をリニューアルし、20年度の1学期から図書館専用になった。また、玄関から教室に上がるまでの廊下を「ブックロード」として本の紹介展示コーナーとして設置した他、踊り場や廊下などのちょっとしたスペースにも本を展示し、学校を挙げて読書の推進に取り組んでいる。図書館リニューアル後は子どもたちの利用が飛躍的に増え、また、授業での図書館利用が多くなり、司書が学校に巡回した際の図書相談、リクエストなどが増加傾向にある。

元の図書館（書架が窓を塞いでいた）



リニューアル後（書架を半分に切断）



紹介本の展示
（廊下に設けられたブックロード）



総合学習の時間
（読み聞かせに使う絵本を選んでいる児童たち）



<海士小の貸出冊数>

(冊)

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	20年度	19年度
全校合計	48	132	335	305	271	300	245	255	200	223	2314	347

※20年度は4月～2月の合計冊数

<海士中学校>

学校のエコ改修に合わせ、図書館を3階から1階へ移動したことにより、生徒たちにとって、入りやすく使いやすい図書館になった。地域開放型施設として、図書館とだんだんホール（図書館に隣接）を合わせエコメディアセンターとして位置づけている。

エコ改修によって新しくなった図書館



②各地区公民館への図書館サービスの充実

全地区公民館へ移動図書館を巡回させ、本館に足を運ばない高齢者への図書館サービスの充実を図った。

i 移動図書館の巡回

従来は、県立図書館からの年2回の配本のみであったが、交通手段がなく、中央図書室や分館まで足を運ばない高齢者への図書館サービスとして、保健師による地区公民館での健康相談の日に合わせて、全地区公民館へ移動図書館を巡回させ、図書の貸出を行った。

会場：町内14地区公民館

方法：全地区に2ヶ月に1回、約70冊の図書を持って巡回し、その場で貸出しを行う（返却は2ヶ月後の巡回日）。1ヶ所あたりの利用者が4～5名のため、担当職員が直接利用者とやり取りする中で、その地区の人のニーズに合った本を選んで持っていく。

【工夫のポイント】

- 高齢者へのサービスの充実として、2ヶ月に1回実施される保健師による地区公民館での健康相談に多くの高齢者が集まることを利用し、健康相談の待ち時間等に本を選んでもらえるようにした。また、高齢者への配慮として、老眼鏡を数個携帯している。
- 地区によって男女比、嗜好の傾向が異なるため、担当職員が地区ごとにマメに記録を取り、持参する本の構成を考慮するほか、利用者との密なコミュニケーションにより「〇〇さんが読みたい本」というピンポイントのリクエストで本を用意している。

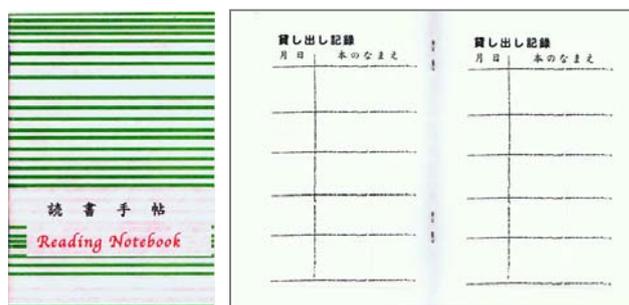
③読書手帖の発行と個々の読書歴・興味に添った読書案内

読書手帖を通じてよりよい読書サービスを提供するとともに、読書への関心を高めてもらうことを意図した。

i 読書手帖の発行

対象：全町民

内容：読書手帖を作成し（職員の手づくり）、希望者に配布した。各自で読んだ本を記録してもらい、読書履歴を振り返ることで、読書への親しみをもってもらうとともに、読書手帖をもとに、その人の興味・関心に添った読書案内を行う。



読書手帖

④小・中・高校、公共図書館の全蔵書のデータベース化と相互貸借システムの導入

全蔵書をデータ化し、町内の各図書施設をつなげることで、蔵書不足を補い、図書館サービスの向上を図るとともに、図書館利用の活性化を目指した。

i 小・中・高校、公共図書館の全蔵書のデータベース化

対象：小学校・中学校・高校の学校図書館と公共図書館

進捗状況：小学校・公共図書館のデータ化は完了したが、中学校・高校はデータ化作業中である。来年度中の保育園・中学校・高校の全図書のデータ化を目指している。

ii 相互貸借システムの導入

小・中・高校、公共図書館をネットワーク化し、児童向け図書の分館、学習資料中心の分館など機能を明確化し、分担収集を行うことで予算の有効活用や本の活用度を上げることができた。また、蔵書データを参照して、図書館間の相互貸借がスムーズに行えるようになった。

⑤読書推進を目的とした読書ボランティアとの連携による読み聞かせイベントや講師を招いての読書講演会等の実施

読書ボランティアによる読み聞かせ等の読書イベントを開催し、読書や図書館利用の促進を図った。

読書ボランティアについて

8年前、福井小学校が読書活動に力を入れ、朝読書と読み聞かせを導入した。その際、保護者に呼びかけ、読み聞かせのボランティアを募ったことでグループが発足した。その後、海士小学校にも同様にボランティアグループができ、現在はPTAのOBが中心となり、2グループ計13名が各小学校を拠点に活動している。

i ブックスタート活動

乳幼児をもつ親子に絵本を手渡すブックスタート活動を実施した。

対象：20年度に生まれた全乳幼児

内容：絵本、読書手帖、カバンのセットを手渡ししながら、1人ひとりに絵本のある暮らしを提案した。

ii おはなし会

ア. 子育て支援センターでのおはなし会の開催（3回実施）

対象：子育て支援センターを利用している親子（参加者毎回20組程度）

イ. 保育園でのおはなし会（3回実施）

対象：保育園児（1～2歳児約25名と3歳児以上約35名の2グループに分けて実施）

ウ. 図書館での一般向けおはなし会（2回実施）

対象：中央公民館図書室（本館）に来館した親子（参加者：9月—3組 2月—5組）

iii 学校での読み聞かせイベント（3回実施）

対象：海士小学校、福井小学校の全児童

内容：7月—七夕イベントとして、影絵人形劇を上演（海士小、福井小）

12月—クリスマスイベントとして、音楽に合わせた読み聞かせを実施（福井小）

iv 本を通じた読書交流イベント

会場：菱浦港の蔵

対象：島内外の18歳以上の読書の好きな人

広報：島外の人へは町のホームページ等インターネットを使って広報した。

内容：島外の人も含めて「読書」や「おすすめの本」などをテーマに語り合う会を実施。

島外の参加者は、隠岐観光も含む宿泊イベントとした。

参加者：10名 島外—5名（うち2名が司書） 島内—5名
⇒島外の人と「読書・本」を通じてのネットワークができ、また、島外からの司書の参加があったことで、互いの図書館サービスの取り組みなどの情報交換もできた。

v 本に親しむための一般向け講演会

テーマ：「本のある豊かな暮らし、本の楽しみ方、子どもへのすすめ方」

講師：くるみの木文庫主宰・石川子ども文庫連絡会会長

会場：中央公民館

対象：一般町民（参加者 50名）

⑥人材育成を目的とした図書館関係者向け研修会の開催

図書館関係者の資質向上とボランティア人材の育成を図った。

i 図書館関係者研修会

テーマ：「図書館の役割と可能性、島での図書館サービスの在り方」

講師：島根県立松江南高校司書

会場：中央公民館

対象：学校関係者、図書館関係者、ボランティア、一般（参加者 40名）

ii ボランティア視察研修会

視察先：隠岐の島町図書館

内容：図書館での読書ボランティアの活動（ブックトーク、ストーリーテリング）の見学、長年活動しているボランティアによる講義と話し合い。

講師：読書ボランティア（島根子どもの読書等推進隠岐の会隠岐支部長）

講義内容：読書ボランティア活動の運営法、読み聞かせの手法など

対象：ボランティア、図書館関係者（参加者 8名）

iii 図書館視察研修会（学校図書館先進地及び県立図書館の視察）

視察先：松江市立城北小学校、東出雲町立東出雲中学校、松江県立松江南高等学校、島根県立図書館

対象：図書館関係者、ボランティア

iv 図書館研修会

テーマ：「子どもへの読書指導の進め方、読み聞かせの手法・意義」

講師：読書ボランティア（島根子どもの読書等推進隠岐の会隠岐支部長）

内容：講師による3、4年生へのブックトークの授業を見学

会場：海士小学校

対象：学校関係者、図書館関係者、ボランティア、一般町民（参加者 30名）

⑦島内外への図書館事業の広報活動

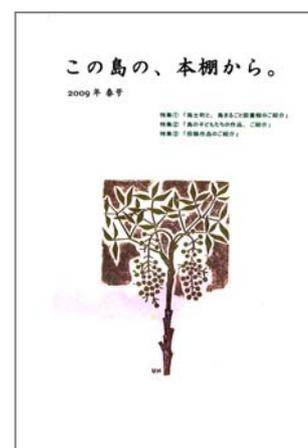
図書館事業について広く周知するとともに、理解・関心を高めてもらうことを目的に、図書館新聞やPR冊子を発行した。

i 図書館新聞「この島の、本棚から。」発行

様式：A4判8ページ 1400部発行

内容：中央公民館図書室・学校図書館・図書館分館の紹介、新着図書案内、「島まるごと図書館構想」の紹介、図書館職員紹介とおすすめ本、図書館ボランティア募集 他

配布先：町民、隠岐島前3島の公共施設、出郷者、海士と交流があった人、寄贈者、海士の図書館事業の島内外の応援団



ii PR冊子「この島の、本棚から。」発行

様式：A4判56ページ 500部発行

内容：本にまつわるエッセイ、詩、俳句、短編小説など、島内外の子どもから大人までに寄稿してもらい、文芸誌のような冊子にした。

配布先：町民、隠岐島前3島の公共施設、出郷者、海士と交流があった人、寄贈者、海士の図書館事業の島内外の応援団

【工夫のポイント】

○島内外の人が双方向に受発信できるような“参加型の文化交流誌”としての文芸誌にするため、子どもから高齢者まで幅広い年代の人に様々なジャンルで寄稿してもらい、読み物としてより身近な存在になるようにした。（海士に来島したことはないが興味がある人、海士と交流があり応援してくれている人などからも作品を提供してもらう）

○文芸誌的なものにするすることで、娯楽施設がない島の町民が読書を楽しむきっかけとなることを意図した。また、この冊子により、島民には島のよさを発見し、島の生活を再認識してもらうこと、島外には島の情報発信になることをねらった。

iii 海士町まるごと図書館のホームページの開設

海士町のホームページの公共施設案内にリンクして、「海士町まるごと図書館ご利用案内」として図書館のページを開設した。図書館の蔵書一覧をPDFファイルで見られるようにし、また県立図書館の蔵書検索サイトともリンクさせ、利用者の利便性を図った。

（6）事業の成果・効果と事業実施後の取り組み

①事業の成果・効果

事業の主な成果・効果は次のとおりである。

i 子どもたちの中に図書館が根づく

図書館というものをまったく知らずに育ってきた島の子どもたちに、学校図書館を主として、図書館らしい場所を提供できた。子どもたちは、図書館が単に本が置いてある場所というだけではなく、調べもの、リクエスト、予約、レファレンスなど、様々な機能をもっていることを認知してきた。また、子どもの本の貸出数も飛躍的に伸びている。保護者からは「学校図書館がよくなって、子どもが本を読むようになった」という声をよく聞く。子どもを通して、保護者にも図書館の存在への認識が広がってきている。

※海士小学校の学校図書館貸出実績（全児童数46名）

平成19年度 347冊→平成20年度 2314冊 約6.7倍の伸び

※福井小学校は19年度のデータがないため比較できず

ii 町民の図書利用が増加

中央公民館図書室をリニューアルし、分館を開設してから確実に利用が増えている。移動図書館の再開により、中央公民館図書室や分館から遠方の車をもたない高齢者にも本に触れられる環境を整えることができた。利用者数、貸出冊数も増えており、中央公民館図書室の蔵書のデータ化も完了したため、今後、住民のリクエスト要求により応じやすくなると思われる。

※図書館利用者数は、平成18年度64名、平成19年度107名、平成20年度260名（2月末現在）と年々増加し、20年度は前年度比2.4倍増となった。これは、島の9人に1人が図書館を利用したということである。

<中央公民館図書室蔵書分の貸出冊数>

年 度	図書一般	マンガ	移動図書館	地域分館	合計	月間貸出 平均
平成 10 年度	358 冊	—	320 冊	—	678 冊	57 冊
平成 15 年度	683 冊	—	283 冊	—	1189 冊	99 冊
平成 19 年度	1483 冊	—	—	—	1483 冊	123 冊
平成 20 年度 (2 月末現在)	1823 冊	271 冊	237 冊	132 冊	2446 冊	222 冊

※平成 20 年度の貸出冊数は前年度比 1.65 倍の伸びである。

iii 隠岐島前の他の島への波及効果

海士町の取り組みを知り、図書館がない隣町（隣の島）から休日に船に乗って図書館を利用しに来る親子連れもいる（町民外でも期間 1 ヶ月で 10 冊まで貸出している）。また、ボランティア研修会には近隣 2 島の全小学校 4 校より計 9 名の参加があった。隠岐島前 3 島内における図書館連携体制の土台ができたことも大きな成果であった。離島の取り組みとして、他へも波及することが期待される。

iv 読書ボランティア活動の促進

ボランティア研修会后、読書ボランティア活動への関心が高まり、新規ボランティアが 5 名増えた。また、司書資格取得の意向をもつボランティアが現在 4 名おり、今後、図書館事業の核となりうる人材の育成もできつつある。

v 島内唯一の書店への波及効果

部会において、図書館の環境整備等についての意見交換をする中で、部会メンバーである書店経営者が刺激を受け、住民のニーズに添うという視点から仕入れや本のディスプレイに若干変化が表れた。

【成功のキーポイント】

- 図書館の利用経験がない島内の関係者に、図書館のサービス、機能について理解してもらい、図書館の必要性について共通理解することから始めた。先進地視察などを通しての関係者の意識の改革がこの事業の推進につながった。特に学校関係者が図書館の必要性を理解してからは、図書館の整備や児童・生徒の利用に関して積極的な協力があり、学校における図書館活用が促進された。
- 小さい島ならではの住民とコミュニケーションを取りながらの図書館サービスが、住民にとっては図書館を身近に感じ、図書館職員にとっては住民のニーズに添って図書館サービスの改善・充実にあたることを可能にしている。

②事業実施後の取り組み

※平成 20 年度委託事業のため、省略。

(7) 課題と今後の展望

①課題

主な課題としては次のことが挙げられる。

i 中央公民館図書室のスペースと蔵書数の問題

本館である公民館図書室自体の蔵書が少なく（20 年度末現在約 4100 冊）、場所がないためスペースを拡張することは難しい。

ii 町費での予算の確保

財政難で町費での裏づけが取れないため、当面、国・県・民間等様々なところからの委託費、補助事業を受けて事業を継続していき、図書館サービスの充実に努め、図書館の役割・意義について町民の理解が浸透することにより、町費での予算が確保できるよう、図書館のステータスを上げていく必要がある。

iii 中核となる人材育成の問題

ボランティアは読み聞かせボランティアが中心で、交流イベントなど、ピンポイントで動いてくれるボランティアはいるが、継続性があるわけではなく、行政主導になっている。図書を中心としたまちづくりを進めるためには、中核となり、継続して活動してくれる人材が必要だが、現在のところその人材が育っていない。行政と協働して図書を中心としたまちづくりを推進していく人材育成が必要である。

②今後の展望

今後は次のことに取り組んでいく予定である。

i 公共図書館の充実

20年度は学校図書館の充実に力を入れたので、来年度からは中央図書室と分館の公共図書館部分の充実に力を入れたい。その中で、特に医療情報や町情報の提供など、情報提供機関としての役割の充実に回り、また、公民館事業とのタイアップも視野に入れながら、各種文化イベント・映画会・文芸誌発行など、文化活動へも取り組んでいきたい。

ii 図書館新聞の発行

2ヶ月に1回くらいの割合で、A4両面印刷程度の手づくり図書館新聞を定期的に発行したい。

iii 地区公民館分館の自主運営

14地区公民館には地区管理の有人公民館と無人公民館の両方があるが、有人公民館のうち4地区で県立図書館の本を配本している（公民館内に本棚があるのみ）。その4地区のうち1地区では、自分たちで新たに本棚を設置し、地区住民に本の寄贈を呼びかけて、本を増やす取り組みをしている。それをモデル地区として支援し、地区公民館を活用した読書活動の活性化につなげていきたい。

iv 「読書の島」を将来的に観光・交流の資源に

観光協会と連携し、蔵を会場に実施した島内外の人による「読書・本」をテーマにした交流イベントのように、「島まるごと図書館」の読書環境を利用して、島でゆったり過ごしてもらおうということを観光資源として売り出し、観光やまちの振興、島内外の交流の促進につなげることも視野に入れ、今後も取り組んでいきたい。